

令和8年度都道府県医師会 勤務医部会連絡協議会



常任理事 涌波 淳子

令和8年度都道府県医師会勤務医担当理事連絡協議会 次 第

日 時 令和8年5月28日(木)
午後2時00分～4時00分
場 所 日医会館3階小講堂 (WEB会議併用)

総合司会：日本医師会常任理事 今村 英仁

1. 開 会

2. 会長挨拶 日本医師会会長 松本 吉郎

3. 全国医師会勤務医部会連絡協議会について

- (1) 令和7年度担当医師会報告 (岩手県医師会)
- (2) 令和8年度担当医師会挨拶 (大分県医師会)

4. 協 議

テーマ：

「勤務医の医師会活動へのさらなる参画について」

(1) 勤務医委員会答申の内容紹介

日本医師会勤務医委員会委員長 一宮 仁

(2) 新たな地域医療構想を巡る動き

①識者による講演

厚生労働省医政局地域医療計画課

地域医療構想推進室長 堤 雅宣

②意見交換

(3) 医師会組織強化に向けた取り組み

①好事例紹介 (2医師会)

大阪府医師会理事 杉本 圭相

大分大学医学部医師会会長 猪股 雅史

②意見交換

5. 閉 会

令和8年5月28日(木)、令和8年度都道府県医師会勤務医担当理事連絡協議会が開催され、Webにて参加した。

配布資料によると、沖縄県医師会会員2,435人のうち勤務医は1,524人で62.6%を占め、全国12番目に高い割合となっている。また、県医師会代議員62人のうち勤務医は19人で30.6%を占め、全国9番目であった。これらの数字から、沖縄県医師会において勤務医が医師会活動に積

極的に参画している現状がうかがえた。一方で、その声をどのように集約し、医師会活動や政策提言に反映していくか、また若手勤務医が地域医療や医師会活動に関心を持ち続ける仕組みづくりが重要な課題であると感じた。

協議事項では、「勤務医の医師会活動へのさらなる参画について」をテーマに討議が行われた。日本医師会勤務医委員会からは、医師会活動への参加促進に向けた答申内容が説明され、特に、医師会側から積極的に情報を届ける「PUSH型」の発信への転換や、医学生の段階から医師会活動に関わる機会づくりの必要性が示された。また、勤務医の意見が政策へ反映されていることの「見える化」、医師会活動を「個人活動」ではなく「地域医療を支える活動」として病院管理者や大学側にも理解してもらう必要性など、それぞれの立場に応じた役割整理が提言された。

私自身も女性医師部会への参加をきっかけに、少しずつ医師会活動が「自分事」となっていった経緯がある。また、コロナ禍でのワクチン接種事業では、多くの若手医師が地域医療活動に関わってくれた。その経験は若い世代の中に小さな種として残っているのではないと思う。その種を無理なく育てていくためには、「参加しなければならない」ではなく、「関わってみたい」と思える環境づくりが重要であり、丁寧な対話や継続的な接点づくりの必要性を改めて感じた。

続いて、厚生労働省より「新たな地域医療構想を巡る動き」について説明があった。高齢化の進行に伴い、85歳以上高齢者を中心とした医療・介護の複合ニーズが増加する中、従来の

病床機能中心の地域医療構想から、外来医療、在宅医療、介護連携、人材確保まで含めた「新たな地域医療構想」へ転換していく必要性が示された。都道府県、市町村、医師会等が連携しながら、2028年度までに地域ごとの構想を策定していくとのことであった。

各医療機関が地域の中でどのような役割を担うかによって、勤務医に求められる役割やキャリア形成も変化していくと思われる。一方で、日々の診療に追われる勤務医に、こうした制度設計や地域医療構想への関心をどのように持ってもらうかは大きな課題である。しかし、現場で患者と向き合う勤務医、とりわけ経験を積んだベテラン勤務医の「肌感覚」は、今後の地域医療構想を考える上で重要な視点であり、その声を地域医療構想へ反映する仕組みも必要ではないかと感じた。

最後に、大阪府医師会および大分大学医学部医師会から、勤務医の医師会活動への参画促進に関する実践報告が行われた。

大阪府医師会からは、「医師会を『知る』から『つながる』へ」をテーマに、医学生期は「知る」、初期研修医期は「つながる」、若手勤務医期は「関わる」、中堅以降は「支える」と段階的な関わり方を示しながら、医学生と語る会、研修医交流会、ワールドカフェ形式の対話企画、LINEによる継続的な情報発信などの取り組みが紹介された。「若手が主体的にテーマを決め、上の世代は支える側に回る」という姿勢や、「医師会とは“つながり”である」という言葉が特に印象に残った。

一方、大分大学医学部医師会からは、大分大学医学部医師会、大分県医師会・郡市医師会、大分県が三位一体となって取り組む「大分地域医療推進連携プラットフォーム」が紹介された。医師会組織強化、医師確保・偏在対策、医師のキャリア支援、大学病院の課題解決などを共通目標とし、大学・医師会・行政が連携している点が特徴である。特に、本年6月に設立された若手勤務医組織「U-40 OITA」は、若手医師の課題解決を通じて医師会への信頼と参加意欲を高める実践的な取り組みとして大変興味深かった。

沖縄県医師会においても、研修医や若手医師を対象とした活動が強化されている。「一人の100歩」ではなく、「100人の一歩」が地域医療を支える大きな力になる。勤務医、開業医、大学、行政がそれぞれの立場を尊重しながら協働し、多くの医師が無理なく関われる仕組みを育てていくことが、持続可能な地域医療につながるのではないかと感じた。

大分県にて令和8年11月7日（土）に令和8年度全国医師会勤務医部会連絡協議会「勤務医の声が未来を創る ～医師会・大学・行政が共に創る地域医療の未来～」が開催され、翌日には勤務医交流会も企画されている。ぜひ、県担当者や大学からも一緒に参加し、「共に創るチーム」が育っていくことを期待したい。

※報告書の詳細につきましてはホームページをご参照下さい。

<https://www.okinawa.med.or.jp/medical/kaihou/houkoku/202303-2/>

